

はすにわ 斜庭の町家

【応募者】 一級建築士事務所 究建築研究室 柳沢 究 / 〒 600-8029 京都市下京区西橋詰町 796 京栄ビル 501
TEL(075) 352 - 5263 / FAX(075) 352 - 5263 / Email: mail@Q-Labo.info

【地域性への配慮事項】

～地域の住文化の観点～

① 地域の住まい方を考慮したプラン

京都御所のほど近く、周囲に京町家の残る厳しい景観規制のかかる地区の一角という敷地条件。「可能な限り明るく広いリビング」「お互いの存在がいつも感じられる家」という若いクライアント夫妻の現代的な要望。これに対して、伝統的京町家の空間を再解釈することで応えている。

その理由は第一に、街並みを含む既存街区の空間秩序を尊重し、これに謙虚にアテンドしたいと考えたためである。第二には、都市が培ってきた居住の知恵を、きちんと継承したいという思いがある。町家といえば軒庇や格子といった表層的要素に注目が集まるが、都市居住の「型」として洗練されてきた町家の空間構成は、少し手を加えれば、現代の生活にも充分有効と考えたからである。

具体的には、伝統的京町家の空間構成要素から、切妻平入・通り庭・奥庭・土間の四点を抽出し現代的にアレンジすることで全体を構成した。詳細は以下および「作品または活動の特色」の項に述べる。

② 地域の気候・風土に対応した工夫

京都特有の夏の蒸し暑さには通り庭を軸とした自然通風・換気によって、冬の底冷えには低温水式床暖房によって対応している。夏の蒸し暑さには、「鰻の寝床」において通風を確保する優れた手法である「通り庭」にならったスペースを各階に設け、街路から奥庭へ風が通るよう工夫している。また、2階の勾配天井頂部に換気ファンを設け温度差換気による暖気排出の仕掛けを設けた。冬の底冷えには、開口部と壁面の断熱性を高めた上で、ほぼ全床面にガス低温水式床暖房を設けて対応。階段吹抜には開閉式断熱スクリーンも設置し、「いつも暖かい家」ではなく、室内温度差の少ない「寒くない家」を目指した。結果、夏冬とも空調機をほとんど使わずに過ごすことができています。

③ 構法・プランにおける工夫

構造は壁量計算に基づく在来木造である。平易な在来構法の空間的可能性を、地域の住文化と結びつけることで開拓したいと考えた。街路から奥へと引き戸を介して自由に広がる空間の流動性は、伝統的町家の（現代でも充分価値をもつ）魅力の一つである。しかし今日の在来木造では、奥行きに比例して増える間口方向の構造壁が、そのような広がりのある空間をつくる際の文字通り障壁となる。この問題を解決するために、「通り庭」沿いに短辺方向の構造壁・設備系・収納を集約した細長いコア＝「通り庭コア」を配置することで、他の部分の空間的・構造的な自由度を高め、同時に将来の改修や間取り変更、設備機器の更新にフレキシビリティを与えている。これは伝統的町家の使われ方から発想された

ものである（平面構成ダイアグラム参照）。

この「通り庭コア」と、1階に寝室・家事室・浴室といった閉じた室（＝夜のスペース）をまとめる構成とをあわせることで、クライアントの望む広く明るい一室空間（＝昼のスペース）を2階全面にわたって作りだしている。

④ 地域の環境に対する考慮

敷地の奥に奥庭を設けている。通り庭の通風機能は奥庭があつてこそ発揮されるからである。さらに奥庭は隣家の奥庭と連続することで、街区レベルで良好な日照・通風・プライバシーを得ることができる。近年では道路側に駐車場兼の前庭を設け、奥に建て結めることが多いが、奥庭のある町家が並ぶ環境においては奥庭の形式をとることが、自敷地だけでなく近隣の環境をもよりよく保つことにつながる。

また、街並みへの配慮からも、壁面線を乱す駐車場のためのセットバックは避け、屋内に玄関と連続した土間兼来客用駐車スペースを設けた。この土間空間は大型引き戸により街路に広く開放でき、地蔵盆などの地域イベントに用いられることを想定している。

～新しい課題の観点～

⑤ サステナブルな地域経営に資する取り組み

本住宅は古い町家が解体された跡の更地における新築であり、直接にストックを改修したものではない。しかし、町家の空間構成の現代的可能性や街区レベルでの配置構成といった、地域で育まれてきた居住の知恵ともいべきものを、既存町家の残る地区において新築として提示したことは、今後の地域のストックの活用維持にいくばくかの貢献をなすものと期待している。

【作品または活動の概要】

- ① 事業主体等 設計者：究建築研究室
施工者：(株)高橋工務店
- ② 計画概要 敷地面積：94.51㎡、建築面積：56.42㎡、
延べ床面積：112.84㎡、階数：地上2階建て、
構造：木造（在来構法）、型式：一戸建て

【作品または活動の特色】

① 計画の主旨

「斜庭はすにわの町家」は、京都の伝統的な町家の特徴を取り入れた新築住宅である。といっても、格子や軒庇といった外観面ではなく、これまで（意外にも）あまり注目されていなかった「町家の空間構成を現代の住宅に活かす」というテーマに正面から取り組んだものである。

30代のクライアント夫妻の要望は「最大限明るく広いリビング」「お互いの存在がいつも感じられる家」という現代における

一つの典型的なもの。一方で、敷地は京都市街中の典型的「鰻の寝床」であり、周囲に古い町家が残る景観規制地区であった。街並みに配慮するのは当然としても、「外側だけ町家風で中は御自由に」というやり方は、今ひとつ釈然としない。むしろ外よりも内、すなわち間取りこそ、京町家に学ぶところが大きいのではと考えた。理由は「地域性への配慮事項」①に前述のとおりである。

具体的には、伝統的京町家の空間から、切妻平入・通り庭+コア・奥庭・土間という四要素を抽出・再構成し、さらに奥庭を「斜めに振る」という単純な操作を加えることで、伝統をふまえながらも変化に富む居住空間の実現を目指した。

② 切妻平入：街並みとの調和+切妻形が生む内部空間の変化

外観：素直に切妻平入りの町家形とし、高さ・形態とも周囲に揃えつつ、京都の左官職人による掻き落としを全面に用いたデザインとして変化をつけている。

内部：2階では切妻形をそのまま現した勾配天井として、天井高に変化をつける一方で、端部では壁と天井を連続させるなどの工夫により、ワンルーム空間の中にもいろいろな場所を作りだしている。

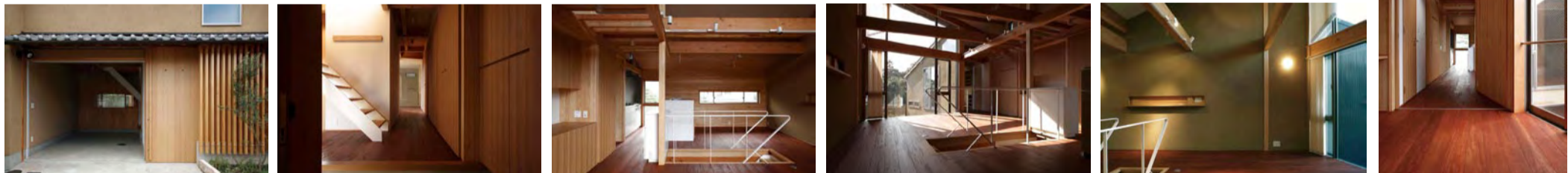
③ 通り庭コア：通風・動線の確保+コアによる自由な居住空間

通り庭は「鰻の寝床」において効率的に動線・通風・居室を確保する優れた手法である。これを採用しない積極的理由はなかった。各階に街路から奥庭へ抜ける「通り庭」を設け、さらに、それに沿って構造壁・設備系・収納を集約した細長いコアを配置し、他の部分の構造的・空間的自由度を高めている。

この「通り庭コア」と、1階に寝室・家事室・浴室といった閉じた室をまとめる構成をあわせて、2階全面にわたる広大な一室空間を作りだし、日常生活の大半を過ごす場に最大限のスペースを確保した。

④ 奥庭：隣接奥庭との連続+斜めの軸が生む親密さと距離感

奥庭があつてこそ通り庭は環境上の意味を持つ。さらに奥庭は、隣家の奥庭と連続することで、より良好な採光・通風・プライバシーを得る。周囲に奥庭のある町家が並ぶ敷地において、奥庭の確保は必須と考えた。ここではさらに、奥庭の開放性を確保しつつ、中庭的な親密さをつくりだすために、奥庭をやや斜めに變形させる（＝斜庭はすにわ）という操作を加えた。同時に、内壁と外壁を同じ荒い掻き落とし仕上げとすることで内外を関係づけている。その結果室内には、ワンルームの連続性と斜庭をはさんだ母屋/離れのような奥行きとが同居することになった。



① 道路より建具を開け土間・斜庭を見る：セットバックを避け、壁面線がなく風の通り道となる「通り庭」が伸揃った街並みに配慮。土間は大型の木製引き戸により街路に大きく開放される。平時は引き戸を閉め、格子を回り込んでアプローチする。
② 1F 玄関より：街路と奥の斜庭をつくる：セットバックを避け、壁面線がなく風の通り道となる「通り庭」が伸揃った街並みに配慮。土間は大型の木製引き戸により街路に大きく開放される。平時は引き戸を閉め、格子を回り込んでアプローチする。
③ 2F 居間より食堂・台所を見る：切妻形をそのまま現した勾配天井。階段吹抜には折りたたみ式の断熱スクリーンが設置されている。
④ 2F 食堂より居間・斜庭を見る：「通り庭コア」によって、建坪いっぱいを使った広い空間と、斜庭に開いた大開口を実現している。窓からは御所の松を臨む。南洋材のフローリングには荏油を拭いて仕上げた。
⑤ 2F 南側の掻き落としの大壁面：斜庭を挟んだ外壁と呼応する。勾配天井の頂部には換気ファンが設置されており、夏季の熱気を排出するとともに、階段吹抜を通じて一階土間の冷気を2階に呼び込む。
⑥ 2F 予備室より「通り庭」越しに台所を見る：右手に斜庭、左手に「通り庭コア」。上部にある水平格子は、将来の増床用構造でもある。

